JSPS Stockholm News Letter

2013 Summer

Vol. 39

Prologue 01 北欧の国　ストックホルムより(7)

News 02
Sweden-Japan National Young Academy Meeting in Stockholmの開催
来会訪問記録
STINTと日本学術振興会とのMOU締結

Reports 04
STINTから東京大学へ教員が派遣される協定について
スウェーデン・日本若手アカデミー合同会議
日本若手アカデミー参加メンバー紹介
ストックホルム発エコタウン “Hammarby Sjöstad”

Academic Information 10
The Global Innovation Indexの発表/ STINT Programの募集
フィンランド論文アーカイブサイト開設/ノーベルセンター建築について/デンマーク大学入学者数/世界大学ランキングの発表
The Swedish Higher Education Authority 2013年度報告書
カロリンスカ医科大学ニュース

Notice 13
セミナー・シンポジウムの開催、イベント情報
二国間交流事業・研究拠点形成事業の募集
外国人特別研究員事業(欧米短期＆一般)
カロリンスカ医科大学同窓会 会員募集
JSPS Stockholm News Letter 定期購読について

北欧の国　ストックホルムより（７）　研究費と研究者について

JSPSストックホルム研究連絡センター長　藤井　義明

夏至祭が終わると、 スウェーデンの人達は、 夏休みの季節に入ります。ストックホルムの住人のほとんどが、 1～2ヶ月の夏休みをとって、ゴットランド島やエーランド島など、 近くの島のサマーハウスに行って、一夏を過ごすか、世界の各地に旅に出かけます。夏休みの最盛期の7月初めから、 8月中旬にかけて、ストックホルムの街は、 あまり人のいない静かな街になります。

それに代わって、多くの観光客がやってきて、街の観光スポットは、観光客と観光客相手の店の人の賑わいになります。最近では、中国や韓国からの観光客が多いようです。私どものように、ストックホルムに住んで間もない人にとっては、ストックホルムの気候の一番良い季節に、この街を脱出するのは、 少し馬鹿げているように思えます。しかし、一年間ストックホルムで生活して、冬を過ごしてみると、北欧の人々に取っての夏休みの意味が分かってくるような気がします。長く、厳しい冬に耐えるには、夏の気候の良いときに、心身共にリセットして、冬を乗り切る十分なエネルギーと、 精神力を蓄える必要があるのです。我々のアパートの隣に住む老夫婦も、また、二人の基礎学校の子供のいる若い夫婦も、7月になると早々に、バケーションに出かけて、8月の中頃に、リフレッシュした元気な姿で、 帰ってきました。

それにしても、1ヶ月も、2ヶ月もまとめて休みが取れるとは、我々、日本人から見ると、 生活の豊かさの違いを感じないわけにはいきません。ちなみに、私の夏休みは3日間でした。厳しい冬に備えるためとは言え、1、2ヶ月の長い夏休みを多くの人が楽しめるのは、生活にゆとりがあるからなのだと思います。スウェーデンは、 高福祉高負担の国とよく言われますが、教育、医療、老後の生活などの社会保障が行き届いていて、将来の生活に対する安心感も、日常の生活にゆとりを与えているのでしょう。 第２次世界大戦直後から、 社民党の政権を引き継いで首相となったエランデルが、スウェーデンのきわめて順調な経済成長の過程で、黄金の60年代と呼ばれる繁栄を築き、その時に、高福祉高負担の国の進むべき土台を築いたと言われています。その後、 何回かの政権の交代がありましたが、ほぼ一貫して、高福祉高負担の道を、 歩んでいることが国民に、政治に対する安心感、信頼感を与えている理由だと思います。

スウェーデン人の科学技術に対する期待と信頼感が厚いことも、研究開発費がGDP当たり約４％と、常に、世界のトップレベルを維持していることからも察せられます。よく知られているように、スウェーデンで発明されて、企業化されたものが多いことが、科学技術に対する信頼感の源になっているのです。

2007年に、教育科学大臣のもとに、The Globalization Councilが組織され、グローバル化が進展する中で、スウェーデンが国際競争力を維持強化するための提言がまとめられました。それによれば、従来、スウェーデンの強みであった医学研究において、論文の引用件数に顕著な低下がみられ、臨床研究で世界をリードすることが、難しくなっていることなどが指摘されました。そのために、2009年から2012年まで、研究開発費の大幅な増額が行われ、さらに、昨年９月には、次の４年間、2013年から2016年までに、再度､同程度の増額が予定され、8年間の総額90億クローネ、30％を超える増額が発表されました。これらの増額は、主として、医学、テクノロジー、気候変動の研究にむけられると発表されています。此が、 今後のスウェーデンの科学研究の動向に、 どのような影響を与えるのか興味のあるところです。ただ、政治の対応が迅速で、力強いことは、さすがという感じがします。

スウェーデンの一般的な研究費は、SRC (Sweden Research Council)によって配分されます。研究費の申請は、5月の始めに締め切られ、3～6人からなる、各スタデイーセクションで審査、採点されて、9月頃にSRCに送られ、最終的に採択が決定されて、10月末から11月初め頃に結果が発表されます。研究期間は3年間で、採択率は25~30%であると言われています。このくらいの採択率だと、優れた研究は、ほとんど採択されることになるので、研究者の不満は、 あまり聞かれない様に思われます。最近の米国NIHのグラントの採択率が10%以下で、研究者の間で恐慌を来していることを考えると大きな違いです。

SRCからのグラントは、研究課題が違えば、 一人の研究者が複数の申請を出すことが可能ですが、実際は、複数が承認される事はかなり難しい。カロリンスカ研究所で言えば、活発に研究している研究室は、ポストドクが４、５人、テクニシャン３人位、大学院学生数人で、全体で８～15人の体制が多い。ボスの給料は大学が払ってくれるとしても（必ずしも全てではない)、研究室の他の職員、ポストドクやテクニシャン等の給料や研究費は、全て、 グラントから払わなければならないから、1つの研究室を運営するのには、 通常、3～4つのグラントを取らないとやっていけないと言われています。したがって、日本のように、30～40人の大きな研究室を持つことは非常に難しい。最も、日本の研究室は、学生や大学院の学生が多いこともあるが。スウェーデンでは、SRCの個人の研究者を対象とした助成金のほかに、Linneus Program のような組織的研究グラントがあり、その構成員となってグラントを得るか、ERC (European Research Council)、 VINNOVA、 SSFなどの公的な研究助成機関のほかに、Wallenberg Foundation、 Swedish Cancer Society、Diabetes Society、 Heart-Lung Foundation などの私的助成財団に申請して、3～4つのグラントを取って研究室を運営するのが、活発に研究を続けるのに必要のようです。

ボスが研究費を稼ぎ、研究の主力は、ポストドクとPhD学生が担う構造は、日本の場合とよく似ています。研究者は、朝はかなり早く、 8時頃から働き始めるが、終了時間も早く、４時頃から徐々に人はいなくなり、６時を過ぎて働く人はほとんどいない。土、日曜日に研究室に来るのは、ごくまれで、発表の間近いPhD学生ぐらいです。この点は、日本の研究室のように、朝から夜遅くまで働き、土、日曜日まで働く人がいるのとは大きな違いです。スウェーデンの研究者は生活を楽しみ、ゆとりをもって研究に取り組んでいるように見えるが、日本の研究者は、ひたすら研究に打ち込んでいるように思えます。どちらの研究の仕方が、優れた研究成果をあげるのに良い方法であるか、にわかに結論することは難しい。どちらの研究方法をとるかは、研究者の気質と研究者の置かれた社会的環境によるのであろうか。

Sweden-Japan National Young Academy Meeting in Stockholmの開催

6月12日-13日にストックホルムセンター主催でSWEDENおよびJAPAN両国の若手アカデミーによる第一回目の会合がストックホルムの王立科学アカデミーで開催された。

各国から10名程度の若手アカデミー会員が参加し、両国の若手アカデミーの組織概要や活動概要の紹介の後、「Career tracks & Life and lab」「Future of National Young Academies & International vs national activities/ collaborations」「Science and technology policies」「How to work on interdisciplinary?」をテーマに活発なグループディスカッションや発表、質疑応答が行われた。

2国間のアカデミーによる会合は両国にとって始めての試みであり、将来を担う若手研究者の育成、及び若手研究者による国際学術交流の促進への契機となった。

若手アカデミーメンバーの大使館表敬

「Sweden-Japan National Young Academy Meegint in Stockholm」の前日である6月11日に、若手アカデミーの代表団が在スウェーデン日本国大使館を訪問し、渡邊大使に今回の会合の開催経緯や趣旨などの説明を行った。

渡邊大使からは「近隣諸国が存在感を増している状況下、日本にもまだ、スウェーデンを含めた諸外国と研究交流活動をしたいと考え若手研究者がいることをアピールして欲しい。」「5年後の日瑞国交開始150周年の際に科学技術の側面からどんな催しを行えるか考えてみてほしい」といったアドバイスをいただいた。

訪問されたのは奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科　駒井章治准教授、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科　狩野光伸教授、名古屋工業大学大学院工学研究科　田中由浩助教の3名。

東京大学　渡邊俊樹教授来会

6月14日、東京大学大学院新領域創成科学研究科　渡邊俊樹教授と山岸誠博士がストックホルムセンターを来会され、同時にセンターが所在するカロリンスカ医科大学本部、SciLifeLabを訪問された。

カロリンスカ医科大学では、国際担当者から同大学の概要を、Career Service担当者から大学内の研究者の雇用状況などについて説明を受けた。その後、Department of Microbiologyの金子明教授より自身のキャリアパスやスウェーデンにおける研究活動についてプレゼンテーションが行われた。

この後、SciLifeLabを訪問し、職員から当施設の設立経緯、現在までの活動内容を説明を受け、カール16世グスタフ国王も視察に訪れたという超解像蛍光顕微鏡を見学せれた。

ストックホルムセンターでは、両国における学術・研究状況の違いなどについてセンター長らと意見交換をし、センターの活動についての紹介も行った。

日本学術振興会東京本部の調査

7月19日-22日に日本学術振興会東京本部から総務企画部植垣健一総務課長、総務企画部　島影博文総務課人事係主任、基金管理課　登島志穂係員の3名が人事調査のためストックホルムセンターに来会された。

センター業務についての説明を行ったあと、センター職員の労働や生活環境について様々な観点からの調査が行われた。

ストックホルムセンターの活動内容を紹介すると同時に、センターの現状や困難な点などを実際に伝えることができる非常に良い機会となった。

Sweden-Japan Academic Network 2013の開催

7月9日、在スウェーデン日本国大使館にて「The 2th Sweden-Japan Academic Network 2013」開催のための打ち合わせが行われた。

本会合は昨年より、王立科学アカデミー（KVA）、在スウェーデン日本国大使館、ストックホルムセンターが開始した現地での交流会で、2013年10月17日（木）にKVAにおいて第2回目会合を開催する。

今回は、スウェーデンで活躍する日本人研究者による講演会や、日本への留学プログラム紹介の強化など、関係機関が密接に連携し、昨年以上に内容の充実を図り、参加者に実りのある会合になるよう、準備を進めている。

デンマークにおけるJSPS fellow交流会の開催

ストックホルムセンターでは、本年よりデンマークにおいてJSPS fellowによる交流会を開催する予定であり、7月2日にその共催機関である在デンマーク日本国大使館、東海大学ヨーロッパオフィスとの打合せが行われた。

各機関の同窓生を集めて交流を行う本会合は11月14日（木）にコペンハーゲンの在スウェーデン日本大使館内で開催することが決定し、日本とデンマークの現状についての基調講演や、共催機関の同窓生の交流などのプログラムを準備している。

本件はデンマークにおけるJSPSストックホルムセンターの始めての活動であり、元fellowと交流を図ることにより、元fellowの帰国後の状況把握、現地におけるJSPS対するニーズ、学術動向の把握につとめたい。

また、本件を契機に次年度以降、デンマークにおける学術セミナーの開催や定期的なfellow会合の開催等に繋げていきたいと考えている。

STINTと日本学術振興会とのMOU締結

スウェーデン研究・高等教育国際協力財団（STINT）と日本学術振興会との間でMOUが締結され、両機関の間で二国間交流事業（共同研究）開始することとなった。

当事業は、個々の研究者交流を発展させた二国間の研究チームの持続的ネットワーク形成を支援する事業であり、現在9月募集がHPで公開されている。

従来スウェーデンにおける対応機関はVINNOVAであったが、今年度よりSTINTへ変更となったことより、申請対象領域が人文・社会科学を含む全領域となった。

	支給経費	採択年数	採択予定数
日本側	250万円以内/年	*1) 1年～2年	3件
スウェーデン側	20万SEK以内/年	*2) 最高4年	

*1)再申請によって2年間の延長が認められる可能性がある。
*2)2年目終了時の中間レポートにより延長の可否が決定される。

日本学術振興会 HP
http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/jrss.html
スウェーデン研究・高等教育国際協力財団 HP
http://www.stint.se/en/scholarships_and_grants/joint_japan-swedish

STINTから東京大学へ教員が派遣される協定について

東京大学　高塚和夫

東京大学は、日本国外の学校で教育を受けた高校生だけを対象者とした教育プログラムを発足させ、2年有余の準備期間を経て、2012年10月（いわゆる秋入学）に新入生の受け入れを始めた。入学試験は高校までの成績等に基づく書面および面接によるいわゆるアドミッション・オフィス（AO）方式で行われ、担当教員は世界の各国で面接等に当たった。このプログラムは、通称でPEAK（Programs in English at Komaba）と呼ばれ、英語の授業だけで卒業が可能なようにカリキュラムが設計されている。PEAKには二つのコースが用意されており、「国際日本研究コース」（International Program on Japan in East Asia）および「国際環境学コース」（International Program on Environmental Sciences）である。すでに2回目の入試を終えているが、優れた学生が世界から集っており、従来の東大生集団とはまた異なった活気を呈している。

本プログラムは、東大に新しい教育的次元を打ち立てていくという期待の下に、総長をはじめ全学の支援態勢により運営されている。特に、国際環境学は、カバーすべき学術的領域が多方面にわたっていることや、食の安全の問題や都市の安全・設計など、特徴的な科目を導入しているために、東京大学の広い部局から集まった60名程度の教員により国際環境学教育機構（Organization for Programs on Environmental Sciences,OPES）を設置し、大学院までの教育・研究指導の運営に当たっている。

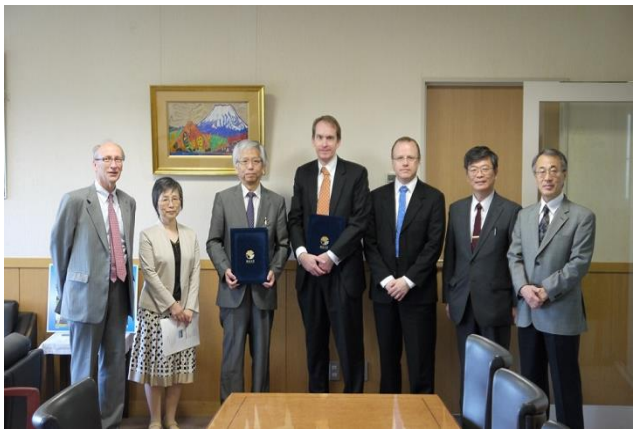
このような力強い全学支援態勢の中で、現総長特別顧問で元スウェーデン駐日全権大使であられたStephan Noreen氏が仲介の労を取ってくださり、このたび、The Swedish Foundation for Cooperation in Research and Higher Education (STINT)と提携を結ぶことができた。STINTでは、選抜された特定の協定大学に教員を派遣し、派遣先での貢献はもちろん、スウェーデンにおいてもその教育体験を生かすという趣旨のプログラム（Teaching Sabbatical Programmeという）を用意しており、このたび我々のPEAKに１セメスター（半年）に1名、数年にわたって（毎年異なった分野で異なった）大学教員を派遣してくださるということになった。派遣費用は、STINTが負担して下さることになっており、本年度はカルフォルニア大学バークレー校とともに新たなパートーナー校として協定を締結していただいた。大変ありがたく、我々PEAKが逆にスェーデンにどのようなお返しができるかしっかり考えなければならないと思っている。

以下、締結に至るまでの経緯を少しご報告しようと思う。Noreen氏を介したPEAKの教育理念や仕組みなどをメール等でお伝えした後、本年2月、松尾基之副研究科長（当時）がSTINTに出向き、詳細な打ち合わせをさせていただいた。その際、対応してくださった　STINTのDr. Andreas Göthenberg（Executive Director , STINT）のおすすめもあって、同氏とJSPSのストックホルムセンターの吉澤さん、中島さんとともに日本大使館を訪問させていただいた。 同氏とともに訪問させていただいた。 STINTとJSPSは、研究者交流や学生の留学などお互いに似たような職務を担当するため、常に密接な交流をもっておられるとのこと。また、日本大使館は、STINTとJSPSの間で研究者交流や学生の留学などについて、常にSTINTと交流があり、松尾副研究科長からPEAKに関するTeaching Sabbatical Programmeを含む協定について説明を行い、今後のご協力をお願いした。

5月17日には、最終的に、東京大学総合文化研究科において、協定への調印式が行われた。STINT側からAndreas Göthenberg博士とMattias Löwhagen氏（Program Manager、STINT）をお迎えし、石井洋二郎研究科長、伊藤たかね副研究科長（PEAK担当）、Noreen総長特別顧問らが出席し、和やかなうちに協定の締結が完了した。写真は締結後取られたもので、左からNorren、伊藤、石井、Göthenberg、Löwhagen、松尾、筆者、（敬称略）の諸氏である。

PEAKは東京大学の国際化事業の流れのなかで、先駆的な試みという以上に、将来の教育的展望を開いていく役割を負っていると思っている。また、環境学やアジアの中の日本を考え、実践していくことにより、母国や国際社会において活躍してくれる人材を育成することが求められている。私たちは、STINTから派遣される教員とこのような協働ができることを楽しみにしている。

最後に、JSPS スェーデンセンターおよび日本大使館において対応していただいた皆様に、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。



スウェーデン･日本若手アカデミー合同会議

首都大学東京　西山 雄二

2013年6月12-13日、日本学術振興会および日本学術会議の御支援を受けて、ストックホルムにてスウェーデン・日本若手アカデミー合同会議が開催された。この会議の目的は、（1）スウェーデンと日本の若手アカデミーの交流によって、お互いのアカデミーの現状や課題を共有し、さらなる国際的な連携や展開を図ること、（2）スウェーデンと日本のあいだの共同研究や学術連携の契機として研究者同士の意見交換や交流をおこなうことである。日本からは10名の若手研究者が参加した。

初日はスウェーデン若手アカデミーメンバーによるガイドで各所を視察させていただいた。まず、カロリンスカ研究所（Karolinska Institute）のSciLifeLabにて現場視察をおこなった。カロリンスカ研究所は教育活動も備え、病院も併設する、医学系の単科教育研究機関としては世界最大の機関である。Erik Lindahl氏のコーディネイトによって、生命科学研究グループの研究成果を伺った。具体的には、次世代シークエンサーと呼ばれる高速の遺伝子配列読み取り機器が最近同研究所に複数導入されており、この機器を用いた各種研究の展開を伺った。

お昼を挟んで、午後は王立工科大学（Royal School of Technology）を訪問し、ロボット工学の研究成果をみせていただいた。生活空間におけるロボットの活用を中心に、ロボットの未知環境への適応や人間との協調作業、ロボット間のコミュニケーションなどについてご紹介いただいた。

夕方、ノーベル博物館を館員のガイド付きで見学させていただき、普段は公開されていない地下の書籍収蔵庫も視察することができた。

翌13日、ストックホルム大学に近接する王立科学アカデミーの施設にて合同会議がおこなわれた。

まず館内で、ノーベル賞の選考委員会にも使用される会場をガイド付きで見学した。歴代のアカデミー総裁の肖像が並ぶ壮麗な部屋は圧巻だった。王立科学アカデミーの歴史は古く、フレドリク1世の発意によって、植物学者カール・リンネ（彼は若干32歳で選出）ら数名の尽力で1739年に創設された。ペストの猛威や大北方戦争によって難局にあったスウェーデンの国力を再建するために、農学、林学、鉱山学の分野で実践的な研究成果をあげることが主要な目的だった。リンネの弟子にあたるトゥンベリー（Carl Peter Thunberg）についても紹介があった。彼は1775年に日本を訪問して江戸幕府参内も経験し、その記録を出版しているが、帰国後同アカデミーの総裁も務めた人物であり、帰国後の講演の自筆草稿を見せていただけた。現在、王立科学アカデミーはノーベル賞の選出の責任を負い、物理学賞、化学賞、経済学賞の選考委員会を設置している。

会議では、まず駒井章治委員長とAnna Sjöström Douagi事務局長からお互いの若手アカデミーに関して組織や活動、創設の経緯に関して紹介がおこなわれた。
スウェーデン若手アカデミーは王立科学アカデミーのもとで2011年5月に創設された。その創立式では、実に印象的なことに、親アカデミーが植物の種に水を注いで、若手研究者に手渡したそうである。若手アカデミーの目的は、学際的な学術交流の促進、科学政策のプラットフォームの構築、高度な学術成果の社会的発信、国際的な交流の拡充など、一見すると親アカデミーと似通ったものだが、若手は親アカデミーとは異なる独自の仕方で活動を展開することが求められる。

その後、双方からひとつずつ研究発表がおこなわれた。西山雄二（首都大学東京）は発表「カタストロフィを前にした人文学の誠実さ」をおこない、「3.11」という三重の災厄に対して哲学や文学は何をなしうるのかについて報告した。また、Danica Kragic Jensfelt氏（王立工科大学）が、ロボットやコンピュータの画像認識という観点から、物体の把握と操作の可能性と課題について報告した。

その後、４班に分かれて実施されたグループ・ディスカッションは若手ならではの視点で議論が交わされた。

「キャリア・トラックと研究生活（ジェンダー）」では、両国の若手研究者をとりまく情勢や女性研究者をめぐる状況、家事負担などについて情報共有と意見交換をおこなった。スウェーデンでは高額の研究費をとるためには海外での研究経験が必要とされるなど、若手研究者が海外で研究するモチベーションが制度的に確保されているとの指摘が印象的だった。他方で、スウェーデンでは大学での正教授の地位が安定している反面、米国などに比べて研究費などの研究環境は劣っているのではないか、とくに大学院生・ポスドクを雇用する際の社会保障の負担が大きいために国際的な競争力を削いでいるのではないかとの発言もなされた。

「各国の若手アカデミーの将来、国際的・国内的な活動や連携」でまず確認されたのは、National Young Academies（NYA）メンバー以外の若手科学者の交流を促進するために、各NYAの交流は非常に重要だということである。スウェーデンと日本は文化的共通点があるため、学術的な交流において意思の疎通が比較的容易であろう。両国間の交流を促進する上で、若手アカデミーの将来的な活動は重要である。

「科学技術政策――政策の決定や議論における科学」では、日瑞両国における科学技術政策への若手アカデミー関与について経験の共有がなされた。その上で確認された方針は、科学者個人ではなく組織として意見を出すこと、政治に入り込むのでなく政策への専門的アドバイザーという立場を貫くこと、意見をまとめる際には関連の状況を踏まえた上で「根拠に基づく（evidence based）」判断をすること、異なるセクターにいる同士（例えば科学者、政治家、官僚など）で適切に意見交換を行い相互理解を深めること、などである。

「学際性をいかに機能させるか」では、専門分野と学際性との効果的な連携とその問題点が指摘された。学問分野の垣根を越えた共同といっても、高度に専門化した他分野について学術的見解を述べることは難しい。自分の専門分野に立脚した狭小なパブリック・コメントにしかならないのではないか。学際的研究における若手ならではのメリットは、ボス的存在を排して、柔軟な発想で民主的なネットワークを形成しうる点にあるだろう。

短期間の滞在だったが、視察からはさまざまな学術的・文化的刺激を受け、日本・スェーデンの若手の連携に向けて、一気に交流が進んだことは有益だった。来年度以降、今度はスウェーデン若手アカデミーのメンバーを日本に招聘して、合同会議を開催することで互いに合意した。今回の出張に尽力していてだいた日本学術振興会および日本学術会議には心より感謝申し上げる次第である。

日本若手アカデミー参加メンバー紹介

慶應義塾大学
環境情報学部

一ノ瀬友博 教授

2012年9月から2013年8月までの予定で、ウィーン工科大学に所属しています。日本学術会議若手アカデミー委員会では、若手委員の中で最も年配でもあります。専門は、景観生態学、造園学、農村計画学で、近年は農村地域の人口減少と高齢化を踏まえて、持続的な地域のあり方を研究しています。また、2011年4月以降は、気仙沼市で震災復興プロジェクトを学生と進めています。今回は、ウィーンから参加させていただきました。コペンハーゲン大学に1ヶ月滞在したことがあったりしたために、スウェーデン南部には何度も足を運んでいるのですが、ストックホルムは、15年ぶり2度目の訪問でした。私の専門も少々関係があるリンネが若き頃から活躍した王立科学アカデミーを訪問できたのは、感動的な出来事でした。王立と称しながら、王からは独立したアカデミーのスタンスと、アカデミーの下部組織でありながら、経済的には独立してスタートした若手アカデミーにスウェーデンの独立心を感じました。最終日には、飛行機までの時間を使って、ドロットニングホルム宮殿を訪れてきました。バロック、ロココ、そして英国式の様式が混在する庭園に魅了されてきました。次回は是非自分の専門に絡めて、農村地域や国立公園などを訪れてみたいものです。

工学院大学
情報学部

蒲池みゆき 准教授

2013年6月の日瑞若手アカデミージョイントミーティングに参加させていただきました。会場である王立科学アカデミーにて、その初期のなりたち、特にProceedingsの発行やそれに伴うCalenderの配布など、初期の科学者たちの足跡と役割を知ることができ、科学の歴史とアカデミーの重厚な雰囲気に圧倒される訪問となりました。会議では「キャリアトラックと研究生活（ジェンダー）」のグループディスカッションに参加いたしましたが、日本でも話題になっているポスドク雇用問題や、女性科学者のキャリアトラックについて、より具体的な状況を共有することができたことが大変有意義に感じられました。この訪問をきっかけとし、研究者雇用問題および研究者間ネットワーク構築の重要性など学術会議で積極的な議論になおいっそう参画していきたいしていきたいと感じています。ご尽力いただいたJSPS Stockholmのスタッフの方々、スウェーデン側の委員の皆様に厚く御礼申し上げます。

奈良先端科学技術大学院大学
バイオサイエンス研究科

駒井章治 准教授

今回のJapan-Sweden joint meetingではJSPS Stockholmの皆様に大変お世話になりました。私自身はData orientedな行動解析と神経機能計 測、光遺伝を 組み合わせ、脳機能の最小単位の探索を目指しております。今回KTHのDanica Kragic教授の研究室を訪れ、ロボット技術を用いたライフログに関してうかがうことができたことは非常に印象深く心に残こりました。我が国の若手アカデミー委員会では現在29名の様々な分野の若手科学者が集まり議論しております。今回のmeetingに刺激を受け、この中から新たな研究分野の創出ができれば幸いです。

首都大学東京
人文科学研究科

西山雄二 准教授

2011年、日本社会は震災・津波・原発という、人類史上初の三重のカタストロフィ（破局）を経験しましたカタストロフィ（catastrophe）はギリシア語源では「転覆」を含意しますが、日本社会は「３・１１」によってまさに転覆し、大きな転換期を迎えました。2012年から、私は共同研究「カタストロフィと人文学」を主宰しています。これまで人間はいかにカタストロフィを表象し、解釈してきたのか。カタストロフィに見舞われた無垢な被災者たちの苦痛をどう受けとめればいいのか。人文学の文献を網羅してカタストロフィと人間の関係を根本的に問うことで、私たち自身の救済や希望の方途を探っています。

名古屋工業大学
大学院工学研究科

田中由浩 助教

専門は、ロボティクス、メカトロニクスで、人間の触覚のニズム解明とそれを活用した触覚デバイスの研究を行っています。日本学術会議若手アカデミー委員会では最年少になります。初日のラボツアーでは、ロボティクス関係の研究室で、おそらくその研究室で開発されているロボットのパステル調の素敵なイラストがいくつかあったことが印象的でした。学術的な関心だけでなく、研究活動の運営や雰囲気づくりにも工夫を感じました。合同会議では、同時期に若手アカデミーの活動が始まった組織として有意義な情報交換が行えました。今後、両国間の若手研究者の橋渡しをするなど、多くの研究者の支援に繋がるよう、連携を深めていきたいです。スウェーデンは初めての訪問でしたが、落ち着いた街の雰囲気と自然が豊かで、また訪れたい国が一つ増えました。

日本若手アカデミー参加メンバー紹介

岡山大学
大学院医歯薬学総合研究科

狩野光伸　教授

私は臨床研修をした後に、研究面ではナノテクノロジーを用いて医生物学の新しい面を拓けないか医薬工連携で進めています。膵癌がなぜ治りにくいのかということの要素を示してきました。教育面では、東大医学部で研究に関わる学生を増やす仕事をし、その後昨年より、その経験を東京以外、医学周辺領域に広げるべく、現職を拝命しています。さて私とスウェーデンのご縁は、既に10年ほどになります。恩師宮園浩平先生（現東大医学部長）がウプサラに留学され強いご縁をお持ちのおかげさまで、何度か訪問させていただいたのが始めでした。昨年新たに日本学術会議の代表派遣にてスウェーデン若手アカデミーの代表を訪問し、交流が始まりました。その際JSPSストックホルムを訪問しましたら是非両国若手アカデミーによる合同会合を行うべきと勇気づけを頂戴して今回実現し、同世代として感じる問題意識が、国を超えてもかなり共通することを認識し連帯感を持てて有意義なものになりました。関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

大阪大学
全学教育推進機構

中村征樹 准教授

小国でありながら、国際的にすぐれた研究成果を実現している秘密はどこにあるのか。そんな関心を抱きながら、今回のワークショップに参加した。スウェーデンの若手研究者たちとの対話や研究室訪問、施設見学を通して、いろいろなことを考えさせられた。スウェーデンの若手研究者もかならずしも現状に満足しているわけではなく、固有の課題があることも実感させられた。スウェーデンを鑑に、日本の研究環境についても多くを考えさせられた。
今回、とくに印象的だったのが、ワークショップ後の懇親会での会話だった。安心して子どもを育てられることが、研究者でもある配偶者とスウェーデンに戻ってきた理由だった、そんな話だった。日本の若手アカデミーでもこれまで、子育てと研究の両立が大きな課題として何度も話題にあがってきた。若手研究者は、研究面で大きな活躍が期待されていると同時に、「子育て世代」でもある。グローバルな人材獲得競争のなかで、子育てを支える環境もまたグローバルな水準で問われてくる。子育て世代でもある若手研究者にとって、生活面も含めて魅力的な環境を整備していくこと。それは、今後の日本の科学研究の水準をも大きく左右していくことになるのではないか。そんなことをあらためて実感させられた。

京都大学
防災研究所

高橋良和 准教授

今回のスウェーデン若手アカデミーとの交流に際し、”How to work on interdisciplinary?”のセッションを担当しました。両アカデミーでは、学際的研究の推進が大きな目標として掲げられていますが、真の学際的研究を進めるためには、単に異なるスペシャリストが集まるだけではなく、俯瞰的視野を持つゼネラリストの性格を持つことが重要です。若手ならではの特質を活かした学際的研究とは何か？総合工学としての側面を持つ土木工学者として、問題提起をするとともに、続く議論を楽しむことができました。帰国前、短い時間でしたが、ストックホルムの街を散策しました。可愛い道路標識も多いですね！ JSPSストックホルムの皆様には、大変お世話になり、ありがとうございました。

東京大学
大学院総合文化研究科

吉田丈人 准教授

専門は、生態学・陸水学。生物の適応と個体数変動の関係について、実験生態系をもちいた実験と数理モデルを組み合わせて研究している。また、富栄養化や外来種などの問題をかかえる湖沼生態系の自然再生を、地域社会と協働しながら進める実践的な研究もしている。
若手アカデミー委員会では、学術の未来検討分科会に所属しており、学術の将来像や社会における学術の役割について、学術内外から意見をうかがいながら検討している。スウェーデン若手アカデミーは、若手の視点から科学技術政策に関する提言をまとめており、積極的で独立した活動に強い印象をうけた。人材育成における制度的な問題や、イノベーションの源泉としての共同研究の重要性など、両国で共通する問題や課題があることを今回の交流で実感できた。国を越えて共有する課題について、今後も意見交換できればと考えている。

東北大学大学院
情報科学研究科

住井英二郎 准教授

私の研究分野は計算機科学（特にプログラミング言語と計算モデルの理論）です。計算機科学にはノーベル賞はありませんが、チューリング賞がそれにあたるとされています。しかし、これまでに日本人の受賞者は1人もいません。自然科学でいうNatureやScienceにあたるとされるJournalof the ACMに日本から採録された論文も、1954年の発刊より約30件のみです。今回のスウェーデン訪問ではこれらの「問題」について改めて考えさせられました。

ストックホルム発エコタウン “Hammarby Sjöstad”

ストックホルムの中心街から南に5～6km程のところにハンマルビー・ショースタッド(Hammarby Sjöstad)と呼ばれる地区がある。ここはストックホルム市が行っている最大規模のウォーターフロント型環境推進エコ住宅都市計画である。ハンマルビーは「住民が特別な配慮をしなくとも、住むだけで環境にやさしい生活ができる」というのがコンセプトになっている。環境に配慮したシステムの75%は既に建築の段階で取り込まれているのだ。町には毎年各国から1万人を超える専門家等がそのシステムを見学しに訪れる。今回はこのハンマルビーについて紹介したい。

都市計画の背景

都市計画前のハンマルビーは工業地帯であり、土壌・水質共に汚染された状態であった。しかし、1990年代、2004年のオリンピック招致を考えていたストックホルム市はこのハンマルビーに選手村を作ろうと考え、大規模な都市計画を開始した。結果、オリンピックの招致はかなわなかったものの、ハンマルビーは人が住み、緑あふれる町として変貌を遂げることとなった。

環境のために

-節水システム

各家庭の蛇口には空気混入フィルターが設置されている。このフィルターによって、蛇口からの水は空気を50%含んだ状態となる。これにより人々は心がけずとも節水することとなる。

また雨水の利用も行われ、公園などの緑に供給されている。

-ゴミの再利用

バキューム管型の分別式ゴミ収集口（写真下）が各に設置されている。ゴミは地下のパイプで収集所に運ばれ、リサイクルまたは焼却される仕組みとなっている。

生ゴミ等はバイオガス生産用の燃料となり人々の生活に活かされる。このシステムで消費エネルギーの50%を養っている。

-都市の交通

環境への配慮と省エネの観点から、自家用車に代わる移動手段が整備されている。公共交通手段の他、カーシェアリングも推奨している。住民の8割が公共交通機関・自転車・徒歩などの移動方法で生活できるよう配慮されている。

人々のために

-公園・広場

人々が生活を楽しみ、共有できるように町のいたるところに公園などの共有スペースが設けられている。水辺には遊歩道や日光浴のできるスペースもある。

-アート

町のいたるところに彫刻やオブジェなどのアートを見ることができる。アート作品ついては、どこで見られるかを示されたマップと作品の説明が記された資料をネット上でダウンロードすることができる。

参考HP（スウェーデン語のみ）
http://www.hammarbysjostad.se/fritid/pdf/konst_i_barnhojd.pdf

The Global Innovation Index 2013の発表

国際連合の専門機関である世界知的所有権機関が各国の学術・研究・産業などの要素を評価した”The Global Innovation Index”の2013年度版を発表した。142の国がランク付けされる中、スウェーデンは2位となった。1位はスイスであり、3位となったのは英国であった。

このランキングは各国の国内主要大学の質、研究開発への投資額、研究や学術へのアクセスの容易さなど84の項目から作成されているとされる。

関係 HP
http://www.vinnova.se/en/misc/menues-functions/News/2013/130207-Sweden-in-second-place-in-global-innovation-rankings/

フィンランド論文アーカイブサイト開設

フィンランド国会図書館がThe Ministry of Education and Cultureの支援の下、フィンランド国内大学の研究論文を閲覧できるウェブアーカイブ サイト”Juuli “を6月初旬にリリースした。

サイトでは検索結果を更に大学別、学術分野別、書かれた言語別などに仕分けることもでき、より複雑な検索が可能となっている。システムは一般公開されており、誰でも使用することができる。

Juuli HP
http://www.juuli.fi./?&lng=en

デンマーク大学入学予定数過去最多

2013年秋からデンマーク国内の大学や専門学校などの高等教育機関に入学予定の学生数が63,525 人となり、昨年を4%上回り過去最多となった。

デンマークでは現在、2020年までに若者の高等教育機関の卒業率を60%まで高めることを目標にしており、今回の増加によりこの目標達成へ一歩近づいた形となった。

Danish Agency for Science, Technology and Innovation　HP
http://fivu.dk/en

STINT　Teaching Sabbatical Programの募集

スウェーデン研究・高等教育国際協力財団（STINT）がスウェーデンの大学教員を各国の協定大学に派遣するプログラム「Teaching Sabbatical Program」の2014年度募集が開始された。

このプログラムはスウェーデンの教員が派遣先大学で教鞭を振るうことにより、両者の国際性を促進し、大学教育においてもよい刺激になることを目指している。

STINTは香港中文大学やニューヨーク大学など13校と協定を持っており、今回の募集から対象大学に新たに東京大学も加わった。

採択者は来年の8月から12月まで各国に派遣されることとなる。

プログラム HP
http://www.stint.se/en/scholarships_and_grants/teaching_sabbatical

ノーベルセンターの建築

6月14日、世界中から11の建築家が2018年12月に開所予定のノーベルセンターのコンペティションの準備のため、ストックホルムに集結した。その多くはヨーロッパ圏からであるが、アジア圏から唯一日本人建築家である妹島和世氏と西沢立衛氏のSANAAも名を連ねている。

2～5の候補者に絞られた後、2012年4月に最終コンペが行われ、建築デザインが決定される予定である。

ノーベルセンターHP
http://www.nobelcenter.se/

上海交通大学2013年世界大学学術ランキング

上海交通大学は、第11回となる世界大学学術ランキング（ARWU）を8月15日に発表した。ARWUが評価指標としているのは、ノーベル賞やフィールズ賞を受賞した卒業生や教員の数、論文の被引用率が高い研究者の数、ネイチャー誌とサイエンス誌に発表された論文数、被引用論文数などを含む6つの指標である。

ランキングでは米国のハーバード大学が11年間1位を保っており、日本の大学は21位東京大学、26位京都大学などが入っている。

北欧の大学では、42位にコペンハーゲン大学（デンマーク）、44位にカロリンスカ医科大学（スウェーデン）、69位オスロ大学（ノルウェー）、その他スウェーデンの大学では73位にウプサラ大学、82位にストックホルム大学がランクインしている。

上海交通大学 HP
http://www.shanghairanking.com/ARWU2013.html

The Swedish Higher Education Authority 2013年度年次報告

2013年1月より旧機関The Swedish National Agency for Higher Education(高等教育庁）に代わって新設されたThe Swedish Higher Education Authorityが旧機関から受け継ぐ形で2013年度年次報告書を発表した。今回の報告書は2012年秋に大学等へ入学したもののデータを参考にしている。概要は以下の通りある。

大学生数について

2012年秋の大学入学希望者は126,000人（留学生を除く）となり、昨年度より8%増加した。これは過去最多の数字となっている。この中で大学入学資格を得たものは59,800人であり、昨年の人数より1%の増加となった。

留学生数について

2011年秋よりEU国籍者とスイス国籍者以外に対しての授業料の徴収が始り、それ以降大学への入学希望者数は減少していたが、2012年秋については前年より1,500人増加し6,500人となった。

現在、大学等に在籍する留学生数は38,100人となっている。中でも最も多いのは約48%を占めるEU圏内からの学生であり、次にアジアの学生が約30%、残りはその他の地域からの学生という構成である。

最も留学生の受入の多い大学はルンド大学であり、ウプサラ大学、スウェーデン王立工科大学（KTH）が続く。この3大学だけでスウェーデン国内の留学生の30%を受け入れている。

教育・研究スタッフについて

2012年の大学における研究・教育スタッフ数は57%であり、昨年と大きく変わらない数字となった。その内女性教員数は昨年同様43%程度であるが、前年より女性教授の人数が増加した。

Universities	Teaching and research staff	Proportion of woman (%)
Uppsala University	2,624	43
Lund University	2,798	37
University of Gothenburg	2,438	49
Stockholm University	2,132	46
Umeå University	1,866	45
Linköping University	1,545	39
Karolinska Institute	1,952	52
KTH Royal Institute of Technology	1,484	24
All univerisities	27,878	43

大学院教育について

2012年度時点で大学院生の数は19,000人となった。2012年度に入学したものは約3,700人であり、昨年度と大きく変わらない数字となったが、外国人入学者は1,470人となり過去最多となっている。

研究資金について

2008年のスウェーデン政府の方針見直しにより2009年から2012年にかけて約147億スウェーデンクローナ（およそ2兆200億円）を研究助成に充てられ、2005年から2008年の予算よりも約105スウェーデンクローナ（およそ1兆575億円）増加した。

更に、2012年に現在の方針を2016年まで継続することが発表され、その間約115億スウェーデンクローナ（およそ1兆725億円）が研究助成の予算として使用されることとなった。

高等教育機関は政府以外にも、ヨーロッパ連合からの研究資金を調達しており、2012年には約1.5億スウェーデンクローナ（およそ22億円）を獲得している。ヨーロッパ連合からの資金はここ数年増加している。

スウェーデンの学生の留学

スウェーデンでは現在、2020年までに3ヶ月以上の海外留学経験を持つ学生（学部生）を20%以上にすることを目標としている。

しかし、ここ数年大きな増減はなく、2012年度のその数は約15%であり、今後力を入れるべき課題の1つとなっている。

留学先として人気が高いのはイギリスとアメリカ合衆国となっている。

関係 HP
http://www.ukambetet.se/download/18.1c251de913ecebc40e780003405/annual-report-2013-ny.pdf

“KI Bladet”　~2013 NO.2~

前回のニュースレターに引き続き、カロリンスカ医科大学にて発行されている
”KI Bladet”というスタッフ誌の内容の一部をご紹介いたします。

学長Hamsten博士の100日間

Hamsten博士がカロリンスカ医科大学学長に就任してから100日が経過した。

この100日間、Hamsten博士は新しい職場の人々と交流し、今後の積極的に取り組むべき課題について取り組みを始め、認識を深めたとしている。

特に彼が時間を割いたのは、カロリンスカ医科大学と公的な医療・保健のサービスとの連携促進についてと若手研究者のキャリアサポートについてであった。

カロリンスカ医科大学と医療・保険サービスについては二つの大きな課題がある。一つは、現在ソルナキャンパスの横に建設が進められている”Nya Karolinska Solna”と名づけられた新たな大学病院についてである。”Nya Karolinska Solna”は2017年秋に完成予定であり、その運営に向け着実に準備が進められている。完成すれば新たな医療現場として住民にサービスを提供することとなる。

もう一つは同大学がStockholm City Councilと共同で行っている”Project 4D”と呼ばれるプロジェクトだ。これは、開発・発見された研究結果をいかに早く医療の現場に投入するかを研究するプロジェクトであり、研究成果と医療の現場・サービスをより強く連結させる可能性を秘めたものである。

この二つの成功はカロリンスカ医科大学のみならず、社会にも大きく影響を与えるであろうことが予想される。

若手研究者へのキャリアサポートについては、既に学内に若手向けの新しいキャリアポストを設ける予定であり、早ければ2014年から成果が出るのではないかと期待しているとのことである。

Hamsten博士は忙しく過ぎた100日間を振り返り、「大変充実した日々であった」と語っている。

Student Unionについて

カロリンスカ医科大学のStudent UnionのChairpersonを務めるHellsimg氏は「カロリンスカ医科大学は研究について大変力を入れているが、教育、学生の生活環境についてはまだ改善できる点が多い。学生が更に愛校心を高められるような環境づくりを目指したい。」と話した。

Student Unionは、学期の始めに教員と学生がコースの内容について共に考えられるような授業作りや、学生が夜遅くまで勉強できるような場所を設けること、また学生の寮の充実などを求めて活動を活発化している。 Hellsimg氏は学生がより充実した生活を送れるようになれば自ずと大学に対する愛校心も高まり、学生が大学生活でより活発に行動するようになるので、大学自体のプレゼンスも向上すると考えている。

“KI Bladet”HP（一部英語）
http://ki.se/ki/jsp/polopoly.jsp?d=38212&l=sv

大学のIT環境と留学生たちの意見

カロリスカ医科大学にて留学生を対象とした意見調査が行われた。調査では留学生たちが学内環境に大変満足しているとの結果が寄せられる一方、大学のIT環境については改善案や要望の声が多く聞かれた。主な要望は、「キャンパス内の無線インターネットアクセスの更なる充実」と「大学のITサポートについての英語での情報提供」の２点であった。

これについて同学のDean of EducationであるHöög博士は「英語での情報提供は既に行っているが、情報をホームページ上で発見することが難しいという実態がある。今回の調査結果では聞き取りきれなかった意見も今後積極的に聞いていきたい。」と発言した。

同氏は大学内のIT環境の強化について、今回の調査結果以外にも、オンデマンドでの授業配信、e-ラーニング環境の整備・強化も推し進めていく考えを示している。カロリンスカ医科大学ではIT教育環境の充実を重要な課題と捉え、引き続き改善を図っていく。

スウェーデン国内大学ランキングにてカロリンスカ医科大学が一位に

2012年のスウェーデン国内大学ラインキングが大学評価団体Urankによって発表された。ランキングではスウェーデンの29の大学について、総合ランキングの他、修士課程や博士課程の評価が行われた。

カロリンスカ医科大学は総合ランキングで一位となり、次点はストックホルム商科大学となった。

女性教員採用について

スウェーデン政府は2012年から2015年の間に女性教員の採用率を47%まで引き上げることをカロリンスカ医科大学に求めている。これを受け、カロリンスカ医科大学では2012年にEqual Treatment Committeeと呼ばれる内部組織を設け改善案を講じている。

現在のCommitteeのChairpersonである Dahllöf博士は現状について「現在、カロリンスカ医科大学内の女性教員は若手層からベテラン層まで一貫して27%程度である。この状態を改善させてるため、今後特定のポジションを選出する際、女性の候補者がどのような理由で選考から外れてしまうのかを調べ、どのような条件があれば女性がポストを取得し易くなるかを調査するプロジェクトを開始する予定である。」とコメントしている。

Equal Treatment Committeeは引き続き女性研究者の採用率を上げるための試み、プロジェクトを推進していく。

Notice

未来アジア・技術フォーラム2013Swedenの開催

将来のエネルギー技術開発に取り組む、APS開発研究会と未来技術研究会、未来アジア技術フォーラ等の共催で、「アジアの再生可能エネルギー利用についてヨーロッパに学ぶー産学の国際技術交流」をテーマとした構想や課題を討議する国際フォーラムがウプサラ大学ゴットランドキャンパスにて開催されます。
ご興味ご関心のある方は是非ご参加ください。

日　時：　2013年9月2日(月) 13：30～16：40（開場：13:00）
会　場：　Conference room in Uppsala University,Campus Gotland,Sweden

東北大学・KTHワークショップの開催

東北大学流体科学研究所がKTH内にリエゾンオフィスを設立し、この秋で一周年を迎えます。
これを記念して、ストックホルムセンター、東北大学、KTHの共催でワークショップが開催されます。
今回のテーマは“International Workshop on Flow Dynamics related toEnergy、 Aerospace and Material Processing Exploring the Future of Light, Matter, and Information in the Nanoscale”です。
詳細は以下をご覧ください。ご興味ご関心のある方は是非ご参加ください。

日　時：　2013年9月10日(火)～9月11日（水）
会　場：　KTH,Stockholm,Sweden
参照HP：　http://www.jsps-sto.com/events.aspx

Sweden-Japan Academic Network 2013の開催

昨年9月に第一回会合を開催いたしました“Sweden-japan Academic Network 2013” の開催が決定いたしました。詳細・参加方法は後日当センターホームページにて公開予定です。

日　時：　2013年10月17日(木)
会　場：KVA,Stockholm,Sweden

Joint Symposium on Environmental Science 2013－ bridging Finland and Japan－の開催

2012年に北海道大学がヘルシンキにリエゾンオフィスを設立したことを記念し、北海道大学と共催の下、シンポジウムを開催することとなりました。
詳細・参加方法は後日当センターホームページにて公開予定です。

日　時：2013年11月26日(火)～11月28日（木）
会　場：University of Helsinki,Helsinki,Finland

Notice

二国間交流事業（共同研究・セミナー）

二国間交流事業は個々の研究者交流を発展させた二国間の研究チームの持続的ネットワーク形成を目指し、我が国の大学等の優れた研究者（若手研究者を含む）が相手国の研究者と協力して行う共同研究・セミナーの実施に要する経費を支援します。
http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/shinsei_bosyu.html

研究拠点形成事業（先端拠点形成型）

日本において先端的かつ国際的に重要と認められる研究課題、または地域における諸課題解決に資する研究課題について、日本と世界各国の研究教育拠点機関をつなぐ持続的な協力関係を確立することにより、当該分野において世界的水準または地域における中核的な研究交流拠点の構築とともに、次世代の中核を担う若手研究者の育成を目的とする事業です。
http://www.jsps.go.jp/j-c2c/gaiyou.html

外国人特別研究員事業（欧米短期＆一般）

外国人特別研究員事業（欧米短期＆一般）（JSPS Postdoctoral Fellowship Program (short-term & standard)）は、諸外国の若手研究者に対し、我が国の大学等において日本側受入研究者の指導のもとに共同して研究に従事する機会を提供する事業です。
http://www.jsps.go.jp/english/e-fellow/index.html

カロリンスカ医科大学同窓会　会員募集

KIでは過去、現在問わず、カロリンスカに在籍されていた方々のためにKI Alumni & Friendsを設立し、様々なイベントの企画、メールマガジンによる情報提供、を行っています。KIにいらした事のある方でご関心がある場合には是非以下ホームページをご覧ください。
https://www.network.alumni.ki.se/portal/public/Default.aspx

JSPS Stockholm News Letterの定期購読について

ニュースレターの定期購読（電子メールにて配信します）をご希望される場合は、機関名、部署、氏名及びメールアドレスを明記の上、info@jsps-sto.com　までご連絡ください。

JSPS Stockholm News Letter　第39号
編　集：二上　佐和江
発行日：2013年8月30日
発行元：日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター
連絡先：JSPS Stockholm Office、Retzius väg 3、171-65 Solna、Sweden
Phone: +46（0）8 5248 4561　FAX: +46 (0)8 31 38 86
Website: http://www.jsps-sto.com/　E-mail: info@jsps-sto.com

JSPS STOCKHOLM